

「氷の館」

ロシア式結婚狂想曲

坂内徳明

一

一七三九年末から翌一七四〇年二月上旬の謝肉祭にかけての時期、ロシア帝国の都サンクト・ペテルブルグで一つの祭りが開催された。「氷の館」(「氷の宮殿」とも)という名のこの祭りは氷結したネヴァ川の上で行われ、現代でも世界各地で行われる氷・雪の祭典に該当するものかもしれない。しかし、それは内容から見るといささか奇妙なイベントだった。実は、この祭りは、ロシア史上の面白いエピソードとして言及され、人口に膾炙することが多いにもかかわらず、歴史研究では真面目に扱われることがあまり多くはなかった。それどころか、「馬鹿馬鹿しい」出来事として嘲笑され、完全に無視されるか、あるいはロシア史上最大の「恥辱」として憤怒の対象とされることすらあった¹⁾。

この祭りの概要は以下のとおりである。この時期のロシア権力の頂点にあったのは、一七三〇年に皇帝の座に就いたアンナ・イオアンノヴナである。一七四〇年十月に病没する彼女にとって「氷の館」は生前で最後の大きな祭典となった。アンナ

女帝は政治的意欲と能力にまったく欠けていたというのがこれまでのロシアソビエト歴史学の一致した見解である（性来の資質に加え、ピョートル大帝後の「混迷」の中で、当時、バルトのクルラントで寡婦として二十年近くを過ごしていた彼女が、自らの意志によることなく中央政界に引きずりだされて皇帝に就き、その後はウ・И・ピロンやА・И・オステルマンらドイツ人寵臣たちに政治を委ねた形になったためである）^②。その反面、彼女は遊戯と娯楽に強く惹かれていたので、宮中でなく市中で多くの遊興的なイベントを行うよう命じた。即位式とその周年記念、誕生日をはじめとする多くの機会に必ず式典を企画し、華美な儀礼、花火、イルミネーション、 mascarade（仮面仮装宴）や宴会に打ち興じたのだ^③。

祭り「水の館」の本来の目的は、一七三五年に開始したトルコとの戦争が一七三九年に終わり、同年九月に成立したベルゴロド講和を祝賀することにあつた。しかし、祭りの目論見はそれにはとどまらなかった。二月の謝肉祭で、おふざけ婚礼を行い、それを mascarade や宴会で参加者が祝い、騒ごうというのである。

アンナの宮廷を娯楽と笑いに充ち溢れさせる上で欠かせぬ要素の一つが、宮廷道化師であつたことは広く知られている。ロシア人貴族の出身としてH・Φ・ヴォルコンスキイ公爵、M・A・ゴリツィン公爵、A・П・アブラクシン伯爵の三名、ピョートル時代以来の宮中道化師としてロシア人のИ・A・バラキレフとポルトガル生まれのユダヤ人ヤン・ダコスタの二名、そしてイタリアから楽師としてロシアに来訪し、アンナとピロンに気に入られて道化師として活躍するペドリローの合計六名が公式に認められた道化師として宮中を哄笑に満ちた空間とすべく活躍していた^④。「水の館」の婚礼における主人公たる新郎と新婦には、この六名中のミハイル・アレクセエヴィチ・ゴリツィン公爵と、アンナの寄食者エヴドキヤ・イヴァノヴナ・ブジェニーノヴァが選ばれた。その祝いの場所は、都の最中心部のネヴァ川の氷上とされ、そこに祭りのために特別に建設された館ならびに内部の調度品はすべて氷で作られることになる。しかも、この氷の宮殿の寝室で初夜を迎える新婚夫婦の姿と周囲のさまざまな氷の作品を、女帝と外国人、さらにロシア国内各地から集められた臣民を含め合計三百名を越える人々が mascarade 行進をしながら観賞し、そのあと祝宴を張るといふのが祭りの趣向だった。

一見、現代版雪まつりとも見えるこのイベントだが、そこに秘められた意図はただのおふざけと結論づけられるほど単純ではなかった。そこには、ロシア風馬鹿騒ぎであるとして無祝や嘲笑、さらに憤激の対象として済ませぬものが確実にあつた。

「氷の館」の祭典は誰が、いつ企画し、その計画はいかに進行したのか。

公式の趣旨は上述したとおりだが、道化師を婚礼させることについては、アンナの意思が強く働いていた。彼女の寄食者が結婚したいと発言したことから、以前から他人を結婚させることに多大な熱意を示していた「仲人女」としての女帝がそれを実現させたのである。もっとも、この花嫁に関しては、カルムイク人であることを除き、彼女個人としての経歴等の情報がまったく見出せない（生年は一七一〇年）。カルムイクという、主にヴォルガ、ドン川下流域のステップ地帯に住むモンゴル系民族名からは、ビョートル大帝期以来のロシアの東方進出によって併合され、捕虜ないしロシア軍兵士となった民族の女性の命運がかるうじて想像されるだけである。彼女はこの婚礼から二年後の一七四二年に息子一人（あるいは二人とも）を残して亡くなった。

新郎ミハイル・ゴリツインはロシアの名門貴族ゴリツイン家のメンバーの一人として、一六八九（八八？）年に、祖父はソフィヤ皇女の愛人、父親はベルミ総督という名家に生まれた。最初の妻マルファが男女各一人ずつの子供を残して一七二九年に死去した後、国外へ出て、フィレンツェで知り合ったイタリア人女性と結婚、それを機にカトリックに改宗する。一七三二年に妻を同伴してロシアへ帰国するが、改宗が大きなスキャンダルとなり、宗務院から懲戒処分を受けるとともに、アンナから道化師の身分を与えられた（一七三二年）。クワス（麦から作るロシアの伝統的発酵飲料）を女帝に供することを仕事としたことからクワスニク、クワスニンのあだ名で呼ばれていたという（一七四〇年の「氷の館」で結婚した妻の死後、ゴリツインは一七四四年に四番目の妻を娶り、一七七五年に死んだというから大往生である）。宮廷道化師であったとはいえ、一七四〇年当時、すでに齢五十を超えていた彼が新郎として白羽の矢を当てられたには、いくらお遊びでおふざけだったとしても、どこか不可解さが残る。

「氷の館」の祭り開催は女帝アンナの意思によって決定されたが、祭典全体の責任者は、官房長官A・II・ヴォルインスキイである⁸⁾。館を氷で制作することを思いついたのは侍従A・II・タチーシチェフ（同時代の政治動向にも深く関わった著名な歴史家で地理学者のB・H・タチーシチェフと血縁関係はない）とされるが、建物等の設計・建設はII・M・エローブキン⁹⁾、II・Я・ブランク、II・A・トレジーニといった初期ペテルブルグ建築史を飾る錚々たる建築家を中心となって行われた。

女帝の命を受けた祭り開催の準備に関しては、演劇史家JI・M・スタリコヴァが綿密に収集し、集大成した資料その他によって知ることができる¹⁰⁾。それによれば、祭りの準備が本格化したのは一七三九年十二月段階である。十二月五日付女帝アンナの勅令は述べる、「予は、わが官房大臣にして狩猟官長ヴォルインスキイに対して、マスカラードに必要な準備を行うように命じた。そのために建設官署から建築家ブランクを大臣のもとに派遣し、職人その他の人々、木材はじめ資材がどれだけ必要かについて、彼の要求を大臣に対してすみやかに知らせること。建設官署に対し、このことを本勅令に従って執り行うよう命ずる」¹¹⁾。同日、この女帝の命を伝える形でシベリア官署に送られた指示には、「現在、宮中では、来たるべき滑稽な婚礼、マスカラードのための準備が行われている」ので、そのために必要な品々（狐や狼の尾、各種兎、熊や山羊の毛皮、水鳥の羽とその具体的数量）をただちに、遅くとも十二月末までに送るように、もしシベリア官署にない場合には市場で購入して速やかに送付するようにと書かれている。その署名がオステルマン、チェルカスキイ、ヴォルインスキイ三名の官房大臣全員によってなされていることを見れば、きわめて重要な命令であることは明白である。また、式典が婚礼とマスカラードからなり、しかもおふぎけの部分を含むこともこの官房指示に読み取ることができる。続く十二月七日付の指令では、祭典のイルミネーションにはかなりの数の絵が必要なので、多くの画家や絵師の協力を求めること、宮廷付きの金細工師や塗料工、指物師を集めるようにと求めている。

祭りの頂点がマスカラードとなることは当然だった。その式次第に関しては後述するが、準備段階においてさまざまな意匠が凝らされ、そのために多くの指示が行われている。例えば、マスカラードには鹿の角が五十本入用なので調達しておくこと（一七四〇年一月九日付）、マスカラードと獣の狩りのためのミラノ犬十五頭、鶏の毛でこしらえた羽飾り百五十本を一月末までに都へ送ること（一月十日）等々。

注目されるのは、必要な人材と品物が詳細に指示され、招聘される人々の土地、その衣装と楽器がきわめて具体的に特定されていることである。例えば、ヴォルリンスキイは、カザン県知事に対して女帝陛下からの命令を伝達するとして「チュレミス、モルドヴァ、チュヴァシ、タタールの人々を男女各三組」を都へ送るように、また、アルハンゲルゴロド県知事に対してはロバリ（ラップランド）、サモエードの人々を各三組、モスクワ県知事には「踊りができる六人の女性と男性」を、ウクライナからは「踊れる若い女性とコサックを六人ずつ」を送ること、しかも「送られてくる人々は全員、自分が使用する衣服等を官費によって新調したものを着てくるように」命じている（一七三九年十一月二十七日付指令）。さらに、調達すべき動物としてモスクワ近郊から良犬十五頭、ノヴゴロドから五十頭の山羊ならびに羊等々。

また、先に記した官房を構成する三名の連記による、十二月五日付のモスクワ副知事ユスポフ公爵宛て命令書によれば、モスクワ近郊のカルীগとアレクシンから、踊り上手で、見目麗しい村の若い男女八名ずつ、また、笛を吹ける若い牧人六名を集めるように、そのためこの命令を受け取ったならばただちに人を派遣し、選抜した男女に対して普段着よりも上等な服を公費で作る手配をせよ、とある。しかもその際の服装は、農夫は通常の白い布でこしらえたカフタン（長裾上着）、半カフタンのかわりに短いコジャン（革上着）、ズボンが丈が長く、まだら模様のものであることをはじめとして、牧人、農婦についても同様に具体的指示が行われている。また、各種楽器として、木製スヴェレリ（ロシアの笛）百本、粘土製リュリヤ（ウクライナの弦楽器）五十本とグドーク（ロシアの弦楽器）三十本、ヴォルインカ（風笛）三十本が必要なので調達せよとの指示がなされている。この官房からの書簡は十日付で受領され、翌日付でユスポフが送った回答によれば、指定された男女のことは上記二ヶ所の代官へ命じ、しかるべき者を集めたこと、所定の金額を与えてモスクワへ向かわせた、その他の五項目については指示を終えたとある。これを受けて、十二月十二日付のカルীগ代官からモスクワ官署宛ての書簡には、モスクワへ派遣される人員の名簿があり、さらに、十二月二十日付ユスポフの書簡は、男女各八名計十六名の名前を列挙している。この他、ロジョーク（角笛）を演奏できる牧人が入用なので、具体的人数と楽器個数、さらに特定の村の名前を例示して、それを集めるようにとの指示や、また、赤・青・黄色の羽根飾りの本数についての言及も見える。

祭りを行うべくこうした人々と品物を都へ集める指示と並行して、すでに帝都に存在する各種の物品とデータを最大限に利

用することも、当然だが、考慮されていた。一七二五年に創設されて間もないロシア学士院（アカデミー）に收藏されている資料と情報を利用するようにとの指示がそれである。秘書官長アヴラム・スヴェルチコフ名で送られた学士院宛ての問い合わせ（一七三九年十二月二七日付）には、「女帝陛下の勅令に従い、マスカラードが準備されているが、そのために学士院内にあるさまざまな民族の衣服の現物が必要である。すなわち、モルドヴァ、チェレミス、チュヴァシ、ヴォチャク、トゥングラス、ロバリ、サモエード、その他のシベリアの諸民族の衣装である」。こうした要請に対して学士院が最大限の協力と資料提供を行ったことは言うまでもない。学士院には、モルドヴァをはじめとした十六余の民族の衣装現物が收藏されていること、それらに関する記述に加えて、通常の移動手段、乗り物として使用される動物に関する記述があること、さらに、チェレミスはじめ十四余の民族に関する記述と絵があることを回答している¹²⁾。

ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツの全ヨーロッパ的プロジェクト「自然と人工の劇場」の一環としての提案に端を発し、ピョートル大帝のコレクションをフォンドとしてスタートした学士院ならびにそのミュージアムとしてのクンストカマー（ロシア語では、そのままクンストカマー）にとって¹³⁾、「氷の館」祭典への参加は、発展のための大きなステップとなった。祭りへの資料提供は、收藏リストと資料の点検のみならず、ロシア国内でようやく開始されようとしている博物学・民族的な調査と研究を前進させる上での大きな契機となったからである¹⁴⁾。

一七四〇年の新年開始とともに「氷の館」は、外装、内装とも準備が完了した。新年の花火はロシア・トルコの講和を記念してあげられたものである。「氷の館」はそのまま二月の婚礼の祭典まで、ネヴァ川の氷上に建てられたままになっていた。

一七三九年から翌年の冬はきわめて例外的な寒さだった。ドイツ人自然科学者でロシア学士院会員となったΓ・B・クラフトは、「氷の館」の記録を残したことで知られているが、彼によれば、一七三九年十一月十日から一七四〇年三月十六日までの冬は全ヨーロッパ的に厳しい寒さであり、最も寒かった記録としては一月二五日午前七時、華氏マイナス三十度であった¹⁵⁾。

二月十七日(日曜日、旧暦六日)に終わる週は謝肉祭(バター週間)の一週間とされ、復活祭の七週間前を節目として、冬の折り返しとも言ふべき重要な祭りの時期にあたる。謝肉祭は正教会でのキリスト教の式典が行われず、農村では「人形」を燃やし、「雪合戦」をし、ブリン(ロシア風パンケーキ)をはじめとした飲食(食べ放題のカニヴァール)と宴会が祭りの中心となることから、きわめて民衆的・異教的な色彩が濃厚な歳時儀礼である。それに加えて、ロシアの長い冬の過ごし方の一つとして、結婚を意識し、その準備をすることがこの祭りの重要な要素となっていた(さまざまに楽しみ・娯楽の過程での異性「観察」と「お見合い」、結婚シーズンとなっていたことを示す中世ロシアの年代記の記述ならびに民族学的データ、多くの諺を参照¹⁶⁾)。そのことから、結婚式をこの時期に挙行するというアンナの思いつきは偶然ではなかったと言える。

祭りのメイン会場は「水の館」であり、現在のペテルブルグ市内でも最中心部にあたるネヴァ川の水上、海軍省と冬宮の間の場所に建てられた。敷地全体の広さは三五平方サージェン(一サージェンは二・一三四メートル)、館はイタリア建築家の名で有名なパラジオ様式によるもので、長さ六サージェン、幅二・五サージェン、高さ三サージェンである。建物正面前には六門の大砲が置かれ、水の砲丸が何度も放たれた。建物の両側には二つのピラミッドと二つの門があり、門の上には花瓶が置かれ、花瓶に挿された木には鳥が止まっているが、いずれも水でできている。門の脇にはドルフィンが二頭、館右側には等身大の水のゾウが立ち、傍らに二人のペルシャ人がいる。象は鼻から上方へ放水して、いろいろな形を作る。水は特製の消防用ポンプを通して海軍省運河から秘密の回路を通ってもへ戻るといふ。夜には、象は中で石油を燃やして燃え上がる噴水となる。「象は生きた象のように大声で吠えるが、これは中に座る人があげた声を管で拡大したため」と見聞者は記している。

正面から母屋へ入ろう。建物の扉は緑大理石を似せた飾りつけがされているが、これも水による。中はまず玄関の間があり、両側に二部屋(それぞれ窓が四つ)、右側が居間で、ここにはテーブルと椅子、棚、壁時計等がある。左側は寝室で、ここには寝台(上に枕と毛布)、カーテン、腰掛、長椅子、化粧台と鏡、壁鏡、暖炉、棚があり、絨毯も敷かれている。天井からはシャンデリアが吊るされ、実際に輝いている。その他、室内にあるものとして、男女スリッパ、新郎用の室内帽子と新婦用の

ナイトキャップ、卓上時計、トランプカード、棚の上には彫像、動物、茶器がある。花を活けた花瓶、ダイダイの樹木と葉、枝にとまる鳥、燭台等、あらためて繰り返すまでもなく、すべてが氷の作品である。建物の外側や内装、調度や家具、インテリア、さらに室内のこまごました品物までが氷で作られていたことに、見聞記を残した外国人たちは異口同音に感嘆の声を挙げている¹⁵⁾。この氷の館は、三月初めに溶け始めるまで建っていた。

いよいよマスカラードの集団が行進を開始する。すでに準備過程で紹介したとおり、ロシア国内から集められた諸民族の代表者が、自分の土地と民族の衣装と楽器を準備し、それを身に付け、演奏しながら行進した。ヴォルインスキイのいる大会本部に集合した参加者の数は二百人とも三百人ともされ、彼らは皇帝のいる宮殿前からネフスキイ大通りを進み、市内の主な通りを行進した後、ネヴァ川上の氷の館へ、さらに冬宮前へ進むというコースである。

婚行列の先導役は、黄金の角を持つ鹿四頭に曳かれた馬車に乗るサトゥルヌス神であり、そのあとを、八羽の鶴に乗る北極星のシンボル、牛に跨る角笛吹きフリュイタルの四人の牧人、杓フリュイタルを手に駱駝に乗る御用将校フリュイタル、続いて、付け鼻をした三人の魔法使いといった面々である。さらに、手が四本あり、頭一つに顔が二つあるおとぎ話の勇者、花婿のお笑い「親衛隊」として、裏返した兎のコートを着て山羊に跨った二四人の戦士、そのあとを、グドーク、ヴォルインカ、ルイリヤ、バラライカ、ロジョークといった各種の伝統的民族楽器を手にした楽師たちが進み、そして、牛や犬を繫いだ櫓フリュイタルの列が続くが、それらに乗るのは、ヴォチャク、ロバリ、カムチャダールといった民族の人々、また、その他の民族の扮装をした人々である。また、行列の中には、魚に乗るネプトゥヌスがいたが、それに扮していたのは、アンナ宮廷公認の六人の道化師の一人であるイヴァン・バラキレフである。カムチャダールの人々が群衆に向かって凍った魚を放り投げるが、これは婚礼でお金を投げることのパロディである。先導の最後は、花婿の馬のかわりとして鞍を置いた驢馬、山羊と羊、そして六頭立ての鹿に乗る花婿「サモエード・ハンの息子クワスニン」である。その後ろは、猿を繫いだ四人のキュービッドを伴う「ユピテルの妻の姿の」仲人女（明らかにアンナを表象する）、そして、マスカラード行列の仕切り役がゾウに乗って進む。彼は長い灰色の髭をたくわえ、黒い服をまとい、胸には花婿の「お馬鹿の紋章」を下げ、手には箒を持ち、周囲には十二人の黒人と三人の助手が駱駝に乗っている。その後、鎌を手に、頭には、神として崇拜する太陽、半月、そして四季を描いた帽子をかぶった異教の祭司が進む。そして、い

よいよ駱駝に乗った花嫁その人、「血縁のない」姑、豚に乗って群衆に野菜を投げるキュービッド、それにモルドヴァ、チュヴァシ、チェレミスといった民族の人々がそれぞれ六人ずつ同行している。最後は、楽師たちと花嫁のお笑いの「親衛隊」である¹⁸⁾。

以上は、マスカラードの式次第を参照したものである。しかし、この祭典を実際に観察し、記録を残したクラフトの報告書に添付されたと思われる絵には、行列の先頭にゾウが進み、その背中に置かれた檻の中に新婚の夫婦が座っている¹⁹⁾。祭りの見聞記を残した複数の人物の記述にも、二人が檻に入れられ、ゾウに乗せられていたとあるから²⁰⁾、このことは間違いない。式次第が変更されたことは十分ありうるが、おそらくは、行進途中で、いよいよ目指す「氷の館」が見えてきた地点で、二人を行列の中央から先頭へ移し、檻に入れたのではないか。というのも、見物者の一人は、氷の館に入った後、夫婦は朝までそこに監禁され、逃げだすことがないよう、扉には見張りを立たせたと、記しているからである。

マスカラード参加者は、新婚夫婦の寝室をはじめとする氷の作品を観賞した後、これもロシア各地からの土地の料理や民族料理がしつらえられた食卓へと向かった。ここでも、諸民族の音楽と踊りが披露されたが、ここでの大きな仕掛けは詩人トレヂアコフスキイによる婚礼賛歌の朗読である。これについては次に述べる。

この食事会とともに、舞踏会も開かれ、ここに女帝が参加したことをフランス大使が書き残している²¹⁾。

四

「氷の館」の祭りの主役には、道化師の新婚夫婦の他に、もう一人の人物がいたことを忘れてはならない。祭りの最終局面である宴会の場に、本人の意思とはまったく反した形でいきなり登場させられ、祭りや婚礼を賛美すべく用意した自作の詩を読み上げるように求められた詩人B・K・トレヂアコフスキイである。

彼は、一七〇三年にヴォルガ川が海に注ぐ町アストラハンで聖職者の家に生まれ、モスクワ、ペテルブルグでの学業を経て一七二六年にオランダへ出立、翌年秋までハーグに滞在した後パリへ行き、ここで一七二七年末から一七二九年十一月まで

滞在中、ソルボンヌで学び、その後はハンブルグで一年足らずを過ごした後にロシアへ戻った。帰国後は、タリマン『愛の島への旅』の翻訳が評判となったことが契機となって宮中に入りし、また、創設されたばかりのロシア学士院で翻訳官、後に教授として勤務する一方、ロシア詩法理論の開拓者にして詩人として活躍、十八世紀前半から後半にかけてのロシア文学史においてM・B・ロモノソフ、A・Π・スマローコフと並び称される文学者である。アンナが皇帝の座に就いたことを知った時、彼ははまだハンブルグ滞在中だったが、そこでただちに詩「女帝陛下即位を祝賀し、ハンブルグで作られた歌（一七三〇年新暦八月十日）」を作成している²²。これは、同年九ないし十月に楽譜付きで刊行された²³。彼がアンナに会見できたのは、一七三二年一月末とされている。

そうした彼が「氷の館」の祭典で自らが大きな役目を果たすことは、彼自身ばかりか、多くの聴衆がまったく予期しなかった出来事だった。顛末は以下の通りである。婚礼の前夜、最高責任者の官房長官ヴォルインスキイから、明日の祭りの場で朗読すべく祝賀の詩を作るようにとの要請があったが、それが完成する前に出頭せよとの命が下る。いぶかしがる詩人が連れていかれた先は、官房ではなく、祭りの運営本部が置かれていた「ゾウの館」であり、ここで詩人は気を失うまで棒で打たれた。この刑罰の理由は不明だが²⁴、ヴォルインスキイの従者だけでなく彼自身も棒を手にしたという。その後一晩、留置される中で彼は求められた詩を完成させ、翌日、イタリア道化の扮装をした彼は祭りに集う人々の前で詩を読み上げたのである。その後、詩人は再び拘束され、打たれ、憔悴しきって帰宅した（その後、彼は元気を振り絞って、あるいは死を意識してか、自らの蔵書を学士院へ寄贈する手だてを取ったという）。さらに、詩人がこのような仕業を受けた経緯を学士院宛て二月十日付上申書に書き、同時にピロンへ訴え出たが、そのことを知ったヴォルインスキイによって再逮捕され、獄へ送られた²⁵。後に、皇帝への上申書（一七四〇年十一月十二日付）の中で、詩人は自分の受けた処遇につき、「さまざまな場所とさまざまな時に、私は暴力的に痛め付けられ、耐えがたい侮辱と、四度に及ぶ非人間的な傷を負わされた」と記すのである²⁶。

トレデアコフスキイが受けた迫害にはどのような背景があったのか。一つは、ヴォルインスキイならびに彼のグループによる反ピロン・キャンペーンの機運である。ピロンも含めたバルト地域出身ドイツ人勢力の政治的躍進に対するヴォルインスキイたちの動きと、それを抑えようとしたピロン派の抗争の狭間に、詩人は放り込まれた。彼がピロンに訴え出て、救いを求め

たことに對する処遇は、そのことを示す（ただし、六月二七日に後者の反ピロン勢力メンバーは絞首刑され、ピロン派の勝利に終わったのが「ヴォルィンスキイ事件」である）。ただし、詩人自身は「ドイツ派」というよりもむしろ「フランス派」に属していたから、当時、ドイツ人が圧倒的な勢力を握るロシア学士院の中で、そもそも彼に對しては十分な評価を与えられることはなかった。同時期に、同じロシア辺境の、ただし、トレヂアコフスキイのアストラハンとは對極に位置する北のアルハンゲリスクから都へ上り、ロシアの諸学問を「創始」し、功なり名遂げたロモノソフとのコントラストとして、トレヂアコフスキイ「神話」が誕生していく契機がここにはあった⁽²⁷⁾。詩人は「氷の館」で受けた「恥」とその後の「嘲り」の中で、四半世紀を生き延びなければならなかったのである⁽²⁸⁾。

祭典「氷の館」で披露された詩人の詩は、全体で二九行からなる。冒頭の二行は、新婚夫婦に向けた挨拶のはずだが、

ごきげんよろしゅう 結婚されたお馬鹿たち

あばずれ女の花嫁 それになんと雄々しき花婿殿

すでに花嫁の形容語として使われた「あばずれ」*блудница* は、現代ロシア語でも女性に對する最大級の罵倒語である⁽²⁹⁾。この当時、はたしてどれだけのインパクトでもって人々の耳に聞こえていたのかは不明だが、現在刊行中の『十八世紀ロシア語辞典』（第二巻、一九八五年）には「一七三〇年代以後は、無礼なものとして書籍では使用されない」との注記がされている。この語は詩全体で四回登場している。

続く第五―六行目は、

道化師クワスニンと あばずれ女ブジェエニーノヴァは

愛で一つになった だが二人の愛はけがらわしい

二人の名前はアンナがつけたと思われる「あだ名」であり、その由来については上述した。新婚二人の愛が「けがらわしい、いまわしい」PIKAとするのは、不謹慎きわまりない。続いて、マスカラード参加者の民族名称や彼らが手にする楽器名が連呼される。

いざ モルドヴァ人たち チュヴァシ人たち サモエード人たち 進め
爺さんは陽気で威勢のいい口上を始めよ

バラライカ グドーク ロジヨーク ヴォルインカを一斉にかきならせ

「陽気で威勢のいい口上」は、民衆の芝居小屋の前に立つ弁士の口からほとばしり出る笑いと活気にあふれた、客を呼び込む科白を連想させる³⁰⁾。

だが、彼らを一方的に賛美するわけではない。

おまえらは おまえたちは 風来坊の仲間

ふしだらな者 放蕩者 そして汚らわしいあばずれ女

今おまえたちが嬉嬉として

音を立て 叫び 踊るのを わたしは見る

美しい春を呼び寄せよ

最初の二行に登場する人々がマスカラード参加者を指すと考えるならば、祭りにはこうした非差別者・ナロードの存在が欠かせなかったことを、この詩は高々と宣言して歌っていることになる。引用の最後の行については、いくらかの注釈が必要で

ある。マスカレードにはトヴェーリ市から集められた御者が参加していて、さまざまな鳥の鳴き声をして春を呼び寄せるところがあったという^⑩。謝肉祭がいましばらく先の春への大きな待望の祭りであったことがうかがえる。春迎えの行事（春を呼ぶ「春迎えの歌」）が本格化するのには、「氷の館」の祭典から一ヶ月後の三月初頭である。詩のテクストに戻るならば、「美しい春を呼び寄せよ」とした原文 *Свищи весна, свищи красна* では、「春」と「美しい」が対句の形になっており、しかもこうした表現手法は「春迎え」の民謡でもっとも一般的に使用されるものだった。

第十八行目では、新郎を「ハンの息子クワスニン」、新婦を「ハンの女ブジュエニーノヴァ」と呼ぶ。むしろ、花嫁はロシア貴族の生まれだが、花嫁はカルムイク人の女性であるから、十七―十八世紀にロシアの支配下にありながらカルムイク・ハン国が存続していたことの記憶がここに蘇ってくるのは当然である。アストラハン生まれの詩人はカルムイク・ハンについて十分過ぎるほど意識していたはずである。

第二五―二七行目は、婚礼の宴席の最後を飾る祝いの常套句、

かくして 今や新郎新婦は挨拶をせねばならない
自分たち二人がいつも平和に暮らせ 眠りが訪れ
おしゃべりし 飲み食いできますように

そして、最後に冒頭の

ごきげんよろしゅう 結婚されたお馬鹿たち
あばずれの花嫁 それになんと雄々しき花婿殿

を繰り返して朗読は終わる。

詩人の信仰の問題は別に論じる必要がある。以下で論及するように、彼がカトリックに大きな関心を持っていたとしても、自覚的な信仰の問題としてではなく、この詩、しかも短期間に強制されて作ったこの賛歌はいかに読めるだろうか。

結論から言えば、この作品は、農耕とそのセクシュアリズムを基礎に置いた「異教性」、あるいは「民衆性」の表象という観点から読むことが可能である。先述した謝肉祭の性格、「春迎え」行事の連想、繰り返し使用される女性罵倒語ならびに悪態語の「反公式」「反文化」性、かき鳴らされる民族楽器の名称、非ロシア・非スラヴ民族ならびに各種ナロードの呼称の連呼、そして、詩には明確でないが、現実のマスカラードに登場した多くの表象（ギリシャ・ローマの神々のアレゴリーや魔法使い、異教祭司、乗り物としての山羊や驢馬等）が、そのことを示している。例えば、第二二行目「新郎は疲れても いずれまた農作業にはげむ」の表現が性行為と農耕のアナロジーであることは明白である。

五

本稿のはじめで、ゴリツインが花婿に選ばれたことにいくらかの不可解さがあると記した。婚礼時点で齢五十を超えていた彼が新郎として白羽の矢を当てられた理由は、いくら宮廷道化師であったとはいえ、祭典がお遊びとおふざけを目的としたものであったとしても、それだけの説明では十分な説得力がない。この点に関しては、何人かの歴史家がすでに指摘してきたとおり、ゴリツインのカトリックへの改宗が原因であったと考えられている。彼がロシア正教を捨ててカトリックへ改宗したのは、すでに述べたように、二人目のイタリア人妻との結婚によるものであり、そのことがロシア帰国後に発覚したため、教会からは懲戒処分を、さらに皇帝からは道化師にされたのだったが、報復はそれにはとどまらなかったことになる。

しかも重要なことは、これがゴリツイン一人にあてはまる問題ではなく、当時、ロシアの貴族の中で流布していたカトリック（ジャンセニズムを含む）への関心ならびにカトリック勢力への警告ならびに反カトリック・キャンペーンとしての意味を持つていたという点である。そして、このキャンペーンは「氷の館」のもう一人の主役となるトレチアコフスキイにも向けられることとなる。そのことは、B・A・ウスペンスキイとA・B・シーシキンが共著論文において膨大な資料を使って詳細に

論証したとおりである^②。それによれば、詩人はごく若い時期からカトリックに興味を示していた。故郷アストラハンでの修学環境はカトリックの宣教活動のただ中にあった。その後のオランダ、フランス滞在と学業時にも、彼を取り巻く多くの人の脈（当時、西欧にいたロシア人を含む）が同時代のジャンセニズムを中心としたカトリックの動向と深く関わっていたことから、詩人はそこで大きな影響を受けることとなる。さらに、この人脈は一七三〇年のロシア帰国後も詩人にとって大きな意味を持つものとして継続された。「氷の館」で彼に対して行われた処遇は、カトリックを嘲笑しようとするセレモニー全体の目的に従ったもの、というウスペンスキイとシーシキンの結論は、きわめて説得的である。

詩人に刑罰を科そうとしたヴォルィンスキイは、かつてアストラハン県知事の職（一七一九—一七二四年）にあって、その当時から、未来の詩人がカトリックに惹かれていたことを知っていた^③、そのことに加えて、ヨーロッパでその興味をさらに強くして帰国した詩人の姿に、祭りの責任者の怒りはより激しさを増したはずである。それは、もしかすると、反カトリックといった枠を超えるものであった。多くの政治的・社会的・宗教的抗争の渦中に置かれ、しかも宮廷詩人としての役目を担わざるを得ない状況の下で、詩人は文学プロフェシヨナリズムの誕生を宣言しようとしたのではなかったのか。そう考えると、約一世紀後に詩人プーシキンがトレチアコフスキイに向けた熱いまなざし^④は理解できるはずである。「あの《マスカラード》の夜、ヴォルィンスキイがトレチアコフスキイを打擲したとき、ロシア文学の歴史……（略）……ロシア作家の破滅の歴史は始まった」（ホダセーヴィチ）^⑤という言葉は大きな意味を持つ。

「氷の館」の祭りは、その笑いと遊戯の底に、カトリック（イエズス会、ジャンセニズム）対ロシア正教、ロシア正教対民衆的異教、西欧古典古代の神話対アジア・シベリア諸民族の宗教と信仰が織りなす宗教紛争的な側面を潜めていた。それは、帝国の本格的成立へ向かう際に不可避的に生まれる、多民族性と多宗教性の確認と認識（そして排除）の過程を内在したものとなくならずである。その点からすれば、「氷の家」のマスカラードは、クンストカーメラの誕生と確立に象徴される民族学・博物学ミュージアム創設を予見させるに十分な「戯れの」実験であった。ネヴァ川氷上に陳列された「展示品」に囲まれる中で、新生帝国の暴走と女帝のカプリッチョに翻弄されながらも、詩人はカンタータに比すべき賛歌を歌いあげ、「文学創造」のための壮絶な戦いを挑もうとしていた。

- (1) 一九八一年に「偉人伝」シリーズの一冊として刊行された A・Г・クジミン著『タチンチェフ』では、「この婚礼が「ナルヴァあるはアウステルリッツに比べても、はるかに恥ずべきロシアの恥辱であった」と書かれている (A. Г. Кузьмин, Тартиев, М. 1981. Стр. 175)。「水の館」に関する文化史的研究は、十九世紀後半のいわば風俗史研究の開拓者 C・H・シュビンスキイ (Шубинский, 1873) に始まり、近年「Л. М. Старилова (Старилова, 1995)」「B・A・ウスンンスキイとA・B・シーシキンによる共同論文 (Усенский и Шипкин, 1997) へと展開されてきた。本稿はそれらに多くを負っている。
- (2) こうした見解の適否は、今後の実証主義史学の検討課題である。E・B・アニーシモフによれば、「アンナ神話」は、ピロンをはじめとする外国人による権力掌握問題と関連しながら、アンナ死後直後のエリザヴェータ女帝期から作られたという (Анисимов, 2002)。⁶⁾ B・O・クリュチェフスキイの有名な一節「我々の歴史上で暗黒の一頁であり、その中でもっとも暗い汚点が女帝その人だった」(B. O. Ключевский, Курс русской истории. Ч. 4. М. 1910. Стр. 390) も参照のこと。
- (3) 近年、多くの成果が生まれている、特に宮中の式典やセレモニー等の祝祭に関する研究を参照。例えば、O. Ю. Захарова, Светские церемонии в России 18-начала 20 в. М. 2001. Ее же, Власть церемоний. М. 2003; Д. Д. Зелов, Официальные светские праздники как явление русской культуры конца 17-первой половины 18 века. М. 2002; A. Э. Жабрева, Маскарады и маскарадный костюм в рукописных и опубликованных материалах 18 века // Маска и маскарад в русской культуре 18-20 веков. М. 2000; Н. А. Огаркова, Церемонии, празднества, музыка русского двора. 18-начало 19 века. СПб. 2004. が参考になる。
- (4) Шубинский, 1873; Анисимов, 2002 に記述がある。特ニンドリーロに関しては、坂内「二〇一〇」を参照。
- (5) ゴリツインが結婚を望んだとの指摘もある。また、「仲人女」としてのアンナという側面は、彼女が受け止めた現実(つく)短期間の結婚生活と死別、再婚希望、長期の寡婦生活)と結婚観といった彼女個人の問題を越えて、典型的ロシア女性としての「世話焼き女」「噂話好き」「おしゃべり女」といったより大きな枠内でとらえるべきであろう(同時に、同時代の演劇ならびに民衆版画に見られる「仲人女」の表象も参照)。あるいは、この点は、誤解を恐れずに言えば、アンナにおける「民衆性」の問題としても考えることができる。
- (6) 「カルムイク娘」は十八世紀以降、ロシアの宮廷と貴族社会では、娯楽と下働きを提供する者として公的に贈答される女性を意味し、「普通名詞化」していた観がある。ヴァルヴァラ・シユレメーチェヴァ公爵に仕えたアンヌシカ(И・П・Алгуноффによる肖像画の名作)(一七六七年)(有名)、エカテリーナ大帝の死後、皇后マリヤ・フョードロヴナ貴族子女寄宿養育協会にマリヤ・ネトローヴナとして引き取られ

たカラムイク娘等が知られている。同様の存在は「黒人（アラブ）の子供」（子供のアラブを従えたエカテリーナ一世、アンナを題材とした彫像を参照）である。

- (7) これを誰が付けたかに関しては確証はないが、アンナだろう。あだ名の命名も、上記註(5)で言及したロシアの「おせっかい女」にとって重要な役目だったはずである。ちなみに、花嫁の姓ブジュニノヴァは、アンナの好きなボイルドポーク *буженина* にもちなんで女帝が付けたとされている。クワスも塩ゆで豚も、ともに「民衆的な」食べ物ではないか。

- (8) 大臣官房 *кабинет министров* は一七三一年十一月にアンナの勅令により創設された。当初はГ・И・ゴロフキン、А・И・オステルマン、А・М・チュелカスキイの三名から構成され、オステルマンの影響が最大であった。ゴロフキンの死後、П・И・ヤグジンスキイが参加、さらに彼の死後（一七三六年四月）二人体制が続いたが、一七三八年四月にヴォルィンスキイが加わった (*Государственность. Россия. Кн. 2. М. 1999. С. 146*)。ちなみに彼は祭りの四カ月後、アンナの寵臣ピロンに対する反逆の廉で「腹心の友人たち」とともに逮捕され、彼に連座した後述註(9)のエロップキンともども一七四〇年六月二七日に処刑された。

- (9) 市建築委員会の中心人物であったエロップキン（一六八九—一七四〇年）の仕事と生涯の全容については、Зоячье Санкт-Петербурга. 18 век СПб. 1997. С. 156-190. を参照。ただし、ここには「水の館」についての言及はな^く。ただし、В. Г. Исаченко, Зоячье Санкт-Петербурга. 18-20 веков. СПб. 2010. には言及が見られ^る。

- (10) Старикова. 1995. С. 642-711; Соловьев. 1963. С. 517-518;

Пауленко. 2002. С. 142-144.

- (11) Старикова. 1995. С. 642.

- (12) Старикова. 1995. С. 650-656.

- (13) ベテルブルグのクンストカメラ（現民族学・人類学博物館）は一七一四年に設立、一七一八、一七一九年に独立した建物となる。創成期のクンストカメラに関する最良の研究は、Р. Николюки. Микроскоп нового. Кунсткамера. Петербург и символический порядок петровской эпохи // *Петр Великий. М. 2007. 49-51*。ライブニッツの側からのロシア、ビョートル大帝との関わりに関しては、ホルスト・ブレデーデカンブ『モナドの窓 ライブニッツの「自然と人工の劇場」』（原研二訳、産業図書、二〇一〇年）がきわめて役立つ。クンストカメラに関しては多数のロシア語関連資料があるが、とりあえず Г. В. Станюкович. Кунсткамера Петербургской Академии Наук. М.-Л. 1933 を参照。ここには、⁴⁷ 收藏されたことへの言及もある。だが、祭典「水の館」で使用されたことへの言及もある。だが、祭典のものについては「無意味で馬鹿げた祭り」とされている (*De zke, c. 76-77*)。ちなみに、この祭りに使われた衣装はクンストカメラに一部分のみが返還されたが、一七四七年の火事により焼失した。

- (14) 18世紀半ばまでのロシア民族学「誕生期」を形成した В. Н. Татищев、И. И. Кирилов、一七三〇—一七四〇年代のロシア各地の調査・遠征、さらに Г. Ф. Миллер、И. Г. Гумерин 等の仕事の概要については、С. А. Токарев. История русской этнографии. М. 1966. С. 79-85. を参照。

- (15) クラフトに¹⁾しては、²⁾ Н. И. Невская, Г. В. Князь и Пётрбургская Академия Наук 18 н./Нелца в России. Пётрбургские немцы. СПб. 1999. また、この冬の集りに³⁾ついては、⁴⁾ビュルガー編『ほらき男爵の冒険』(岩波文庫、新井裕皓士訳)にも言及がある。ちなみに、ミュンヒンハウゼン男爵は一七三九年にブラウンシュヴァイク家の公子アントン・ウルリヒの婿入り同行してロシアを訪れた。ほんの短期間ながらロシア軍としてトルコとの戦闘に参加、アントン・ウルリヒがホルモゴルイ(訳者はシベリアとする)に流された後も、女帝エリザヴェータの宮廷内で勤務した。
- (16) 中世以来の一般的な結婚シーズンには、生のエネルギーが高揚する夏六、七月と収穫後の秋から冬、九月から二月までとし、特に冬は一月六日から謝肉祭までの時期とする以下の記述を参照。B. A. Рыбаков, Язычество древней Руси. М., 1987. С. 177.
- (17) Старикова, 1995. С. 693-711; Русский быт, 2010. С. 294-300.
- (18) Успенский и Шипкин, 1997. С. 304-311.
- (19) 先述したクラフト著『記述』(一七四二年刊行)には、水の家の図面とともに絵六点が収められている(筆者未見だが、Старикова, 1995その他で見ることができ⁵⁾)。ソウはその一枚に登場するが、行列の先頭とも見える。ビョートルに始まるロシアにおけるソウの文化史に関しては、とりあえず K. A. Borjanov, Slony i kofe: чужое как свое//О культурных в России. М., 2006.
- (20) マルキーズ・ド・ラ・シィタルド(一七三九—一七四二、一七四三—一七四四年にロシア宮廷で勤務)、マンシィェティン(宮廷に出入りしたのは一七三六—一七四四年)といった人々の手紙や覚書による(Старикова, 1995; Русский быт, 2010)。
- (21) Старикова, 1995. С. 706.
- (22) 詩の本文七行目は「この恩寵は天空より皆へと注がれる」とある。人名アンナという言葉の古代ユダヤ語語源が「神の恵み・恩寵」であることから、ロシア語の「恩寵」благодать(文字通り、神が与えたよきもの)と重ねた手法である。ジャンセニズムに顕著な「恩寵」論争とトレジアコフスキイの関連を考えるヒントとなるかもしれない。
- (23) 彼は、ロシア初期の本格的な宮廷詩人として、詩のみならず曲を創作している。現存する音楽頌詩(カント)の数は六十曲、バリアントを含めると百六十を越えるという。アンナ女帝に対する詩人の音楽賛歌に関しては、上記註(3)にあげた Огаркова, 2004. С. 38-42に詳しい。さらに、音楽家としてトレチマコフスキイに⁶⁾関しては、⁷⁾М. М. Сохраненкова, В. К. Тредяковский как композитор. Памятники культуры. Новые открытия. 1986. Л., 1987.
- (24) 命じられた詩が完成しなかったこと、祭りのリハーサルに遅れたこと、アレクサンドル・クラキンス公爵(詩人にとって⁸⁾はヨーロッパ放浪時の「恩人」で、庇護者かつメセナである一方、ヴォルィンスキイの政敵の一人)と親密な関係にあること、ヴォルィンスキイを思わせる詩(寓意詩「自慢屋」と⁹⁾作られたこと等が考えられている。Письма русских писателей 18 века. Л., 1980. Стр. 63. 参照。
- (25) Соловьев, 1963. С. 529-533; П. П. Пекарский, История Императорской Академии Наук в Петербурге. Т. 2

СПб, 1873. С. 77-83. Письма русских писателей 18 века. Д. 1980. Стр. 48-49.

(26) Письма русских писателей 18 века. Д. 1980. Стр. 48.

(27) 優れたトレチアコフスキイ論の著者であるイリーナ・レイフマンによれば、「ロシア文学の『創世神話』において、ロモノソフが創造者＝ヒーローの役割を果たしたとするならば、トレチアコフスキイはヒーローの『馬鹿の双子』『口のきけない悪魔の分身』であるという。Reyman, 1990, p. 27-28.

(28) 「氷の家」祭りを有名にした同名のタイトルを持つ歴史小説（一八三五年）の作者И・И・ラジューチニコフに対するА・С・ブーシキンの書簡（一八三五年十一月三日付）を参照。ここで詩人は『氷の家』を優れた作品であると評価しながらも、小説家の「ヴォルインスキイ事件」のとらえ方に疑問を示し、さらには、トレチアコフスキイ親に強い不満と怒りを記し、この卓越した詩人を「受難者」であるとして最大級の敬意を示している（А. С. Пушкин, Собрание сочинений в десяти томах. Т. 10. М., 1978. С. 244-245）。

(29) блядочка は блядь 「売女」「娼婦」の指小表愛形。блядь に関しては、例えば Н. П. Колесникова Е.А. Корнилов Поле русской брани. Ростов-на Дону, 1996. Стр. 46. 40-41 И. З. Раскин. Энциклопедия хулиганствующего

орлоджка. М., 1994. С. 88-94. には豊富な用例とこの語に対する考察がある。ペレストロイカ以後、ソビエト、ロシアでは「社会的方言」（俗語、流行語、犯罪語、収容所語、政治的・性的タブー語、死語等々）に関する多数の辞典が出版されており、罵倒語についても同様である。

(30) Успенский и Шипкин, 1997. С. 300, примечание 16.

(31) Успенский и Шипкин, 1997. С. 298, примечание 3. これは、マスカラードを実際に見物し、後のエリザヴェータ帝期に陸軍中將となった В・А・ナンチョーキン 「覚書」からの引用である（Русский барт, 2010. С. 296）

(32) Успенский и Шипкин, 1990. この論文の改訂版は Успенский, 2008 に収録されている。

(33) 詩人は、ヴォルインスキイがアストラハン県知事の職にあった時期（一七一九―二四年）、アストラハンで修学中であり、カトリックが作った一七二〇年頃に学校へ入学した。この学校創立自体が大きな問題となり、宗務院の知るところとなるが、ヴォルインスキイは学校を存続させ、カトリックを弁護したことがある。しかし、詩人がカトリックに興味を持っていないことを、その時以来知っていたのは間違いない。

(34) 註 (28) を参照。

(35) Батман, 2010, p. 210.

Bibliography

- Анисимов, 2002—*Anisimov E. V.* Анна Иоанновна, М., 2002.
- Курятнинов, 1996 (авт.-сост.)—Русская старина: Путеводитель по 18 веку. М., 1996.
- Дажечников, 1835 и 1858—*Дажечников И. И.* Ледяной дом. Саранск, 1985.
- Павленко, 2002—*Павленко Н. И.* Анна Иоанновна. Немцы при дворе. М., 2002.
- Прямлянский, 1941—*Прямлянский Л. В.* Тредиаковский//История русской литературы. Т. 3. М.-Л., 1941.
- Русский быт, 1914—Русский быт по воспоминаниям современников. 18 век. М., 1914 (М., 2010).
- Соловьев, 1963—*Соловьев С. М.* История России с древнейших времен. Кн. 10. М., 1963.
- Станюкович, 1953—*Станюкович Т. В.* Кунсткамера Петербургской Академии Наук. М.-Л., 1953.
- Старикова, 1995—*Старикова Л. М.* Театральная жизнь России в эпоху Анны Иоанновны. Документальная хроника 1730-1740. Выпуск 1. М., 1995.
- Тредиаковский, 1935—*Тредиаковский В. К.* Спиховорения. Л., 1935.
- Успенский, 2008—*Успенский Б. А.* Вокруг Тредиаковского. Труды по истории русского языка и русской культуры. М., 2008.
- Успенский и Шишкин, 1990—*Успенский Б. А. и Шишкин А. Б.* Тредиаковский и ясенистыг//Символ. №23. Париж, 1990.
- Успенский и Шишкин, 1997—*Успенский Б. А. и Шишкин А. Б.* «Дурацкая свадьба» в Петербурге в 1740 году. Европа Orientalis, 16. Roma, 1997, No. 1, 1997.
- Шубинский, 1873—*Шубинский С. Н.* Придворный и домашний быт императрицы Анны Ивановны//Исторические очерки и рассказы. М., 1995.
- Ватман, 2010—*Vatman E.* The House of Ice//The Possessed. N. Y., 2010.
- Reyftan, 1990—*Reyftan I. Yasilii* Tredjakovsky. The Fool of the "New" Russian Literature. Stanford UP, 1990.
- 坂内「二〇一〇—坂内徳明「女帝と道化の時代」『人文・自然研究』第五号

(はんなんごくとくあき／言語社会研究科教授)